

## 子ども・若者の文化財保護の実態について —「文化財愛護少年団活動」を中心に—

森屋 雅幸（現代教育研究所研究員）

### 1. はじめに

2017（平成29）年5月に文部科学大臣から文化審議会に、文化財保護法改正を視野に入れて諮問された「これからの文化財の保存と活用の在り方」に対して、同年12月に第一次答申として「文化財の確実な継承に向けたこれからの時代にふさわしい保存と活用の在り方について」（文化審議会2017）が公表された。この第一次答申の中には、「個々の文化財の計画的な保存・活用と担い手の拡充」が謳われ、ここでは具体策として個々の文化財の保存・活用にかかる計画の策定が示された。この計画策定の意図は、文化財の現状を明瞭化させ、その保存・活用へ地域および行政の支援を強化させることにある。

この計画の策定について文化庁が2019（平成31）年3月に公表した「文化財保護法に基づく文化財保存活用大綱・文化財保存活用地域計画・保存活用計画の策定等に関する指針」（文化庁2019）では、「当該市町村の区域における文化財の保存及び活用を図るために当該市町村が講ずる措置の内容」を盛り込むことの記載があり、この留意点として「普及啓発や人材育成については、文化財の担い手を広げていく観点から、地域住民や訪問者はもとより、次世代を担う子供たちが文化財の価値・魅力に触れることができるよう、地域学習の教材等としての文化財の活用など、学校教育・社会教育と連携した取組について位置付けることが有効である。」と示されている。この計画策定は2019（平成31）年4月に施行された改正文化財保護法で明文化されるに至った。

このように現在の文化財保護政策では、次世代の文化財保護の担い手の育成が喫緊の課題となっており、とくにその担い手として子どもや若者に期待が寄せられていることがわかる。そして、子どもや若者に文化財を普及するための方途として「地域学習の教材等としての文化財の活用など、学校教育・社会教育と連携した取組」が挙げられ、今後、各地域においてこうした具体的な文化財保護施策の検討が求められることが想定される。

ただ、管見の限りではあるが、子ども・若者の文化財への興味・関心を醸成するような文化財保護施策の在り方に関する研究は確認できず、これとともに子どもや若者が具体的に現在に至るまで、どのように文化財保護に関与してきたのか、その実態を分析した研究も確認できない。そこで、本稿では今後、子ども・若者を対象とする文化財保護施策を展開するひとつの足掛かりとなるような基礎的研究を目的に、過去において、子ども・若者を対象とする文化財保護施策および子どもや若者の文化財保護の実態を明らかにする。

### 2. 学校教育と文化財保護の関わり

子ども・若者を対象とする文化財保護施策やその保護の実態を確認する前に、子ども・若者と文化財保護の関わりについて学校教育はどのように取り扱ってきたのか、以下では、学習指導要領の内容から明らかにする。

戦後の社会科の学習指導要領には「文化財」や「文化遺産」といった用語が確認でき、文化財保護に関する記述も確認することができる。例えば、1955（昭和30）年に改訂された小学校学習指導要領社会科編の「第2章小学校社会科の目標」の内、「社会科の目標と児童の能力」の項目に示された三つの事項のひとつに「生活を豊かにかつ能率的にするために、社会の諸施設や資源を愛護利用し、文化財をたいせつにする能力を養わなくてはならない」<sup>1</sup>という文化財を保護する能力養成の必要性の記述が確認できる。また、中学校においても1969（昭和44）年に改訂された中学校学習指導要領の内容には、歴史的分野の記述に「郷土の史跡その他の遺跡や遺物を見学させて、わが国の歴史の発展を具体的に知らせ、郷土とわが国の歴史の発展との関連を考えさせるとともに、文化遺産を愛護し尊重する態度を育てるようにすること」<sup>2</sup>という文化遺産（文化財）愛護に関する一文が確認できる。

このように文化財は社会科の教材として扱われるとともに、戦後の学校教育では、その保護を志向する教育が意図されていたことがわかる。小学校学習指導要領社会科編が改訂された1955（昭和30）年頃の文化財保護行政の動向をみると、1954（昭和29）年5月に文化財保護法が改正され、無形文化財や民俗資料、記念物の保護制度の整備、埋蔵文化財の保護の強化、地方公共団体の事務の明確化などが取組みられ、これを機に文化財の普及活用の事業が取組みされた（文化財保護委員会1960：352-353）。具体的には1954（昭和29）年11月に文化財保護強調週間の設定、1955（昭和30）年1月の文化財防火デーの設定などがある（同上）。こうした1955（昭和30）年頃の文化財保護行政の動向を鑑みると小学校学習指導要領社会科編の改訂は、こうした動向を反映していた可能性が考えられる。また、中学校学習指導要領が公表された1969（昭和44）年は、日本は高度経済成長の最中であり、地方にも都市化の波が押し寄せ、開発が多発し、文化財が危機に瀕した時期でもあり、1969（昭和44）年に改訂された中学校学習指導要領の内容は、こうした社会背景を少なからず反映した可能性が推察される。

ところで、上記の小学校・中学校学習指導要領の文化財保護にかかる一文には「愛護」という用語が確認できるが、同時期にこの「愛護」の用語を使用した施策として、1966（昭和41）年度に地域住民組織を育成して文化財愛護の日常実践活動を推進することを目的とした「文化財愛護地域活動」（金田1966c：31）という施策が確認できる<sup>3</sup>。「文化財愛護地域活動」は文化財保護に対する国民の理解を喚起し、協力推進の強化を目的に1965（昭和40）年4月に設置された文化財保護委員会事務局の普及課が所管した施策である（金田1966b：26-27）。この普及課の普及活動の指標には1.学校教育における文化財学習の強化、2.地域社会住民による社会教育その他をとおしての文化財学習と愛護活動（滅失、き損等の事故防止活動）の推進、3.マス・コミを利用した国民一般に対する知識・情報の提供という、三つの事項が掲げられたが、この二つ目の目標実現を具体化したのが、「文化財愛護地域活動」であった（金田1966a：32）。「文化財愛護地域活動」の趣旨には「ことに青少年が文化財愛護精神を身に着けることによりわが国の歴史と伝統を尊重し、自然と文化を愛護する気風を涵養することをねらいとしてこの地域活動を青少年指導の一環としてすすめるよう配慮する」（文化財保護委員会1968a：70）と記されるようにこの施策は、青少年教育としての側面も意図され、ここには指標のひとつ目の「学校教育における文化財学習の強化」という内容も当然含まれるものと考えられ、1969（昭和44）年改訂の中学校学習指導要領は、こうした施策を反映した可能性を有すると筆者は考える。そこで本稿は、「文化財愛護地域活動」の施策を子ども・若者を対象とする文化財保護施策として選定することにし、こうした「文化財愛護地域活動」を事例として、子ども・若者の文化財保護の実態を明らかにする。以下では、この施策の詳細と青少年育成との関りを概観する。

### 3. 「文化財愛護地域活動」の施策と「文化財愛護少年団活動」

「文化財愛護地域活動」の施策では都道府県の推薦により、文化財保護委員会（後に文化庁）が2か年の期間で一市町村を「文化財愛護モデル地区」に指定し、各地で独自の愛護活動が取り組まれた（文化財保護委員会1968a：72）。このモデル地区を指定した意図を当時の普及課長の金田智成は次のように説明する（金田1966c：31）。

文化財教室なりの学習の機会を利用しての郷土やわが国全体の文化財に関する知識・理解を深めるとともに、文化財愛護グループなどの集団活動をととして郷土所在の文化財の巡視・清掃等の奉仕活動を行ない、文化財を滅失・き損等の事故から守るための日常実践活動が展開されることになるのである。この場合、とくに文化財愛護グループには児童青少年が参加して、彼らが文化財愛護精神を身につけることにより、郷土や祖国の歴史と伝統を尊重し、自然と文化を愛護する気風や生活態度を涵養することをねらいとして、この地域活動が青少年指導の一環としても有効に進められるよう配慮してほしいものと考えている。（傍点原著者）

このようにモデル地区では、文化財愛護グループの組織化とその「文化財愛護地域活動」に子ども・若者が参加することで、文化財愛護の精神を身につけることを目的としていたことがわかる。なお、「文化財愛護地域活動」の施策にあたっては、各地域で独自に取り組まれていた文化財愛護に関するグループの活動が参考にされていた（金田1966a：33-35）。この活動事例を示したのが表1である。

この活動グループは、金田智成によれば、（1）その土地に所在するある特定の指定文化財を保存するための地域組織のようなもの（民俗芸能保存会、史跡顕彰会など）、（2）学術的研究を目的とした同好組織のようなもの（郷土史研究会など）、（3）学校や社会教育関係団体など活動プログラムにとり入れているもの（クラブ活動として歴史研究班とか青少年・婦人・老人などグループ活動など）、（4）広くかつ一般的に文化財保護を目的として結成された団体のようなもの（都道府県文化財保護協会など）の4種類に分類できるという（同上：35）。この分類をみると、表1の活動団体は（3）に分類されるものがほとんどで、とくに小・中学校、高等学校あるいは青年団グループといった子ども・若者を主体とする団体（小中学校、高等学校〈定時制含む〉、青年団、企画中含む）は、40団体の内、28団体を数え、半数以上を占める。天然記念物を対象とした愛護活動がほとんどであるが、史跡や遺跡なども含まれ、特定の種類の文化財ではなく多種多様な地域の文化財を対象とする特徴をもつことがわかる。なお、（3）に分類される子ども・若者から組織されるグループは、文化財少年団・文化財愛護少年団などと呼称されるが（文化財保護委員会1968b：1）、本稿では文化財愛護少年団の呼称に統一する。以下では子ども・若者の文化財保護の実態を文化財愛護少年団活動から明らかにする。

この文化財愛護少年団の活動について、1971（昭和46）年当時、文化庁管理課長であった宮野礼一は、（1）学校のクラブ活動ないしはその延長、（2）文化財愛護をスローガンに掲げた地域子供会的な団体、（3）子供会の中に設けられた文化財愛護を目的とするグループ活動、（4）郷土の伝統芸能の少年保存会的な団体というように4種類に大別できることを報告している（宮野1971：51）。表1の内、文化財愛護少年団は上記のとおり28団体を数えるが、この内（1）の学校（定時制含む）のクラブ活動として実施されていたと考えられるグループは21団体確認でき、そのほとんどが学校を行為主体として取り組まれていたことがわかる。表1で各文化財愛護少年団の発足年を確認すると、昭和30年代が散見できるが、小矢部市の埴生少年団のように戦前期から活動しているグループも確認できる。

都道府県	所在地	団体名	人数	対象文化財	活動概要	備考
北海道	阿寒町	阿寒中学校ツルクラフ	32	御路のタシチョウ	日記、絵画（絵画用としてのような葉紙）、他県との研究交換、「鶴の日記」発刊	1957（昭和32）年発会
北海道	阿寒町	阿寒湖小・中学校	240	阿寒湖のソリモ	気象観測、毎年早春に打ちあげられたソリモを湖に返す作業	（児童の安全に問題）
北海道	阿寒郡鶴居村	下雪裡小学校	53	御路のタシチョウ	気象観測、絵画、観察記録	PTA協力（寄付）
北海道	阿寒郡鶴居村	幌呂小学校	117	御路のタシチョウ	学習、絵画（絵画用トーカー紙）	PTA協力（寄付）
青森県	平内町	浅所小学校	—	小湊のハチヨウ	観察	
青森県	市浦村	十三小・中学校	—	小湊のハチヨウ	観察	
青森県	むつ市	大平城学校	—	小湊のハチヨウ	観察	
宮城県	仙台市	木下地区老人クラブ奉会、控本地区老人クラブ健寿会	—	史跡陸奥国分寺	毎月16日（市民清掃の日）に前記史跡周辺を清掃	
福島県	須賀川市	老人グループ	—	史跡長山寺経塚	毎月1回（初申の日）に前記史跡と隣接する日枝神社を清掃	1884（明治17）年～（81年間）
福島県	川内村	川村中学理科クラブ	—	平伏沼モリヲオザエル	地元青年が外敵イモリ退治、クラブで明確からふ化し増殖	（今年も約五千匹を沼に放す）
栃木県	今市市	落合中学校	全校	日光杉並街道	苗の補植、根の保護	（本年度200本）PTA協力（土盛り）
群馬県	高崎市	高崎市文化財愛護子ども会	全校	日光杉並街道	学習、害虫駆除、環境整備、果樹がけ	
群馬県	沼田市	沼田高校定時制	—	金井政碑、山の上碑	美化清掃	
埼玉県	野上町	野上町婦人会	84	野上郷青石塔婆	環境整備、清掃	1956（昭和31）年～子どもたちも協力
富山県	小矢部市	城生少年団	51	護国八幡宮	月2回社殿清掃、学習（とくに夏季休暇）	1935（昭和10）年発会
福井県	小浜市	今富小学校コウノトリクラブ	40	コウノトリ	観察、エサ場づくり、絵画	1960（昭和35）年～
長野県	大町市	大町北高等学校	—	白馬連山高山植物帯	花畑、登山路の清掃	（1966（昭和41）年8月9日～11日122名）
長野県	松代町	真田山大学園（老人クラブ連合会）	70	長閑寺内真田家霊屋	学習、除害清掃	
静岡県	静岡市	静岡市東中学校文化財少年団	30	駿府城跡、片山庵寺、登呂遺跡	研究、清掃参仕	社会科の教科の一環
静岡県	静岡市	静岡市竜南小学校文化財少年団	88	学区内の政治、特に民衆、民話	研究	郷土クラブを組織
静岡県	清水市	清水市羽衣少年団	50	第五中学校校区、三保松原一体の文化財	愛護活動の実践	
静岡県	清水市	清水市日立文化財少年団	350	第四中学校校区、鉄舟寺や日本平	保護活動、植樹、大清掃	
静岡県	磐田市	磐田市磐田郷土クラブ	47	古墳	保護活動	市児童会館センターを拠点
静岡県	駿東郡裾野町	駿東郡裾野東小クラブ	37	箱根用水、富士山	研究、清掃参仕工業開発と文化財の関係について調査	町全体に文化財保護の動き
愛知県	刈谷市	刈谷井ヶ谷青年団	36	かきつばた群落	自然学習、根の除去、刈取、花見時警戒	
愛知県	刈谷市	富士松中学校	—	遺跡	自然学習、根の除去、刈取、花見時警戒	
三重県	四日市市	四日市中央工業高校考古クラブ	30	遺跡	ハートル	
三重県	大台町	大台町教育文化会社会科サークル（教員）	—	—	調査研究、愛護活動	
奈良県	明日香村	明日香村青年団、婦人会老人会	—	石舞台他	学習、環境整備、説明板取付、展望台建設	NHK「史跡を守る青年たち」
鳥取県	米子市	佐々木古代文化研究室文化財パトロール隊	15	県西部地区の遺跡	巡視、現状研究	
鳥取県	鳥取市	鳥取市連合婦人会	—	鳥取砂丘	清掃、啓発運動	（不定期）
岡山県	備前市	西鶴山畠田老人クラブ	—	丸山古墳	清掃、案内	
岡山県	岡山市	長寿の会	50	備前国庁跡	草刈り、清掃	
山口県	秋芳町	美禰郡連合婦人会	—	秋吉台	清掃、啓発運動（健康運動の一環）	8月1日～8月31日毎日10人交替
山口県	美禰市	美禰市伊佐青年団河原支部（文化財愛護少年団）企画	—	河原の大堰	清掃、啓発運動（健康運動の一環）	（延500名出動）
愛媛県	—	—	—	—	—	
長崎県	長崎市	長寿会	—	外八墓地	清掃、環境整備、募金	
熊本県	山鹿市、玉名市、宇土市	山鹿高、玉名高、宇土高考古クラブ	—	遺跡	ハートル、清掃、調査	

表1 地域における「文化財愛護地域活動」の実例（1966（昭和41）年現在）<sup>4</sup>



これら文化財愛護少年団の人数規模は約30～50人規模で確認できるが、全校的に取り組む活動もあり、その規模は一定ではない。以下では文化財愛護少年団について、文化財保護委員会が1968（昭和43）年に発行した『文化財愛護少年団活動事例集』<sup>5</sup>から、さらに詳しくその実態を明らかにする。『文化財愛護少年団活動事例集』では1967（昭和42）年12月末現在で、全国に文化財愛護少年団が20団体確認できると報告されている（文化財保護委員会1968b：1）。この数字は表1で確認できる文化財愛護少年団の団体数と開きがあるが、この20団体という数字は、当時の文化財保護委員会が公式に確認していたものということが推測され、実際は大小、多種多様な文化財愛護少年団が全国で活動していたことが想像できる。『文化財愛護少年団活動事例集』で紹介された団体の概要をまとめたものが表2である。なお、事例集には20団体の内、報告のあった15団体が収録されている。

所在地	名称	発足年	主な発足の契機	主な活動
福島県いわき市	湯本第二中学校文化財少年団	1966（昭和41）年	遺跡破壊	遺跡の分布調査、巡視
栃木県足利市	足利文化財愛護青少年隊	1966（昭和41）年	モデル地区指定	巡視、学習、清掃活動
富山県立山町	谷口文化財愛護少年団	1966（昭和41）年	モデル地区指定	清掃活動、民俗資料収集
富山県立山町	芦峠文化財愛護少年団	1966（昭和41）年	モデル地区指定	巡視、学習、清掃活動
富山県小矢部市	南部地区文化財愛護少年団	1959（昭和34）年	市教育委員会の方針	清掃活動、環境美化、講和
富山県小矢部市	宮島地区文化財愛護少年団	1960（昭和35）年	市教育委員会の方針	清掃活動、写生大会、展示会
富山県小矢部市	護国八幡宮文化財愛護少年団	明治時代	—	清掃活動、神事奉仕
富山県小矢部市	水島地区文化財愛護少年団	1962（昭和37）年	市教育委員会の方針	練習、保護啓蒙
静岡県磐田市	磐田市文化財少年団	1965（昭和40）年	県教育委員会の指導	清掃活動、環境美化、学習
静岡県清水市	日立文化財保護少年団	1965（昭和40）年	子ども会有志で発足	清掃活動、害虫駆除
静岡県清水市	羽衣文化財少年団	1965（昭和40）年	三保松原のゴミ問題	清掃活動、環境美化、学習
静岡県韭山町	韭山町文化財愛護少年団	1967（昭和42）年	市教育委員会の方針	環境美化、学習
兵庫県伊丹市	寺本公団文化財愛護少年団	1966（昭和41）年	市教育委員会の方針	学習、美化活動、巡視
香川県坂出市	坂出市文化財少年団	1966（昭和41）年	市教育委員会の方針	清掃活動、環境美化、学習
愛媛県松山市	松山少年文化財保存会	1965（昭和40）年	モデル地区指定	学習、保護啓蒙

表2 文化財愛護少年団一覧（1967〈昭和42〉年12月末現在）<sup>6</sup>

表2を確認すると、まず、発足年はそのほとんどが1965（昭和40）年前後であり、ほぼ同時期に発足していることがわかる。これは発足の契機に文化財愛護活動モデル地区への指定が確認され、少なからず、文化財保護委員会事務局の普及課の諸施策が影響した可能性が推察される。また、1964（昭和39）年は、青少年の戦後第2の非行のピークが訪れ、犯罪の悪質化、非行の増加などが問題となった時期であり、1966（昭和41）年に青少年育成国民会議が結成され、総理府に青少年局が設置されるなど、政府内で青少年の健全育成に関する取り組みが総合的に行われていた時期でもある<sup>7</sup>。例えば、韭山町文化財愛護少年団ではその発足に際し、「たまたま全国的に青少年非行化の徴候が著しく、青少年団体活動の伸び悩みが問題視されていた折りとして、時宜に適した少年団の誕生ということで教育委員会関係者、文化財関係者から賛辞と激励をうけた。」（同上：42）と記されるように、文化財愛護少年団の発足が重なったこの年代は青少年による非行が社会問題になっており、こうした社会問題を意識していたことも考えられ、県教育委員会の指導や市教育委員会の方針が発足の契機になったグ

ループは、地域の文化財保護の方針はもちろん、こうした青少年育成を推進する政策の影響を少なからず受けていた可能性が考えられる。実際、時期は異なるが、戦後第3の青少年の非行のピークとされる1983（昭和58）年に発足した秋田県平鹿町の文化財愛護少年団では、発足の中心となった当時町教育委員会職員であった山田貞吉によれば、今の少年非行の原因は郷土軽視にあるのではと感じるようになり、これが文化財愛護少年団を発足させた理由のひとつと説明しており<sup>8</sup>、青少年育成の観点からこうしたグループを発足させた事例も確認できる。

ただ、こうした社会情勢を受けて、すべてトップダウンで文化財愛護少年団は発足したわけではなく、例えば、寺本公団文化財愛護少年団の発足では、市教育委員会が地域ぐるみの文化財保護を目的に文化財愛護少年団の設置を地域に呼び掛けたが、このとき、寺本公団において少年団設置に対し、賛同者の熱意や協力があつたことが報告されており（同上：47）、当時、地域住民もこのような文化財愛護を希求していたことが推測できる。とくに湯本第二中学校文化財少年団や羽衣文化財少年団のように、児童・生徒の文化財保護に対する想いによる内発的な取り組みも少なからず確認できることから、変貌する地元の景観や文化財滅失や破壊の危機を生活の中で感じ、自分自身がその危機に働きかけるにはどのようにしたらよいかという気持ちの発露として、文化財愛護少年団活動が登場した側面もあったと筆者は考える。また、文化財愛護活動モデル地区の指定が少年団発足のひとつの要因になっていることを鑑みると、モデル地区指定により、自身の地域が全国から衆目を集めるという契機になり、これが少年団発足の動機にむすびついた可能性も十分に考えられる。こうした意味で、「文化財愛護地域活動」の施策は、全国各地に点在した地域の文化財愛護にかかる諸活動を顕彰することにより、これら活動を活発化させた一面を有することが推察される。

#### 4. 文化財愛護少年団活動に対する子ども・若者の想い

文化財愛護少年団に参加する子ども・若者はどのような意識で活動に取り組んでいたのだろうか。この点を最後に明らかにしたい。

表2に掲載される足利文化財愛護青少年隊は、発足の翌年にその活動が新聞報道されている。以下では、この記事을参考にしてグループの参加者がどのような意識で文化財愛護に取り組んでいたのかを確認する<sup>9</sup>。

（前略）スシ屋の二階での激論は「活動が地につかない。仲間づくりがむずかしい」というのだ。

原因は何か。結局、なにかをつなぐ“くさり”が文化財ということだった。演劇サークル、コーラス・グループ、フォーク、ダンスの会なら、会員は喜んで集まるだろう。だが、お寺や遺跡を回り、文化財を調べたり、パトロールするのが、“楽しくてしかたがない”というわけにはいかない。

専門の知識がないことも、障害の一つだ。市の文化財専門委員をよんで話を聞いても、専門家になり切れるものではない。追い打ちをかけるように、マスコミが“襲撃”してきた。働く青少年のグループ活動、文化財愛護の精神、ボーイスカウトばりの規律—この三拍子そろったグループは「文化財パトロールに乗り出す青少年隊」と足利市内はもとより、全国へ紹介されていった。有名になればなるほど「実績をあげなければ」とあせりが出る。

足利文化財愛護青少年隊は同記事によれば、およそ20歳から23歳までの年齢層のメンバーで構成され、小中学校を活動拠点とする文化財愛護少年団とは異なる性質をもっている。発足から1年で「活

動が地につかない。仲間づくりがむずかしい」と、活動は難航していたといえ、これは趣味のグループのように若者の興味・感心を引くものでなく、文化財がテーマであることがなおさら活動を難しくしていたことがわかる。ただ、あえて文化財をテーマにしたのは「なにかをつなぐ“くさり”」という、すなわち、地域の一体感やつながりを生み出す紐帯として、活動グループが文化財を認識していたことが考察できる。また、活動が脚光を浴びたことによる焦りがあったことも明らかである。このように足利文化財愛護青少年隊の活動は必ずしも順調に進んだわけではなく、難航していた様子が伝わるが、そうした状況でありながらも若者がこのグループに参加しようとした意識はどのようなものであったのだろうか。

同記事によればトラックで古文書を収集する20歳の青年は、護身術の経験者で「文化財パトロールに、ぼくのウデが役立つかもしれない」と思ったことが参加動機であり、一方で16歳の少年は「むかし、文化財を“荒らした”ことをすまなく思って」参加したことが動機として述べられている。参加動機はさまざまであるが、単に仲間づくりということだけでなく、文化財のために何かできることをしたいという想いは共通しているといえる。とくに16歳の少年のようにかつて文化財をき損させたことへの反省の念は、文化財愛護の気持ちの芽生えととらえられ、こうした子ども・若者の文化財愛護の想いを受容する場としても文化財愛護少年団は存在したといえる。

また、上記の記事から、グループの参加者たちは、活動に際して専門知識をもたないまま、文化財に関わることへの何かしらの危惧を抱いていたこともわかる。ただ、当時隊長でこのグループの発足に関わった26歳の青年は記事の中で「専門家ではないのだから、限度はある。しかし、少しでも、文化財へ関心を持ち、祖先が残してくれた貴重な宝物を守ろうとする態度がだいじなのではないだろうか」とコメントしており、専門家ではない自分たちでできる文化財保護に取り組むことの重要性を訴えている。

こうした非専門家による文化財への関与は、一般的にそれが仮に独断的なものであれば、文化財の滅失・き損につながりかねないという危惧が生まれることが想像できる。しかし、文化財愛護少年団活動は文化財を滅失・き損から守ることを目的に巡視などをおこなっているうえ、足利文化財愛護青少年隊のように文化財の専門知識がないことを自認し、知識を学びながら活動するという姿勢を鑑みれば、こうした活動が文化財の滅失・き損につながる可能性は極めて低いと筆者は考える。むしろ、こうした文化財愛護少年団や文化財愛護活動は、新たな文化財保護の担い手を育む可能性を十分に有するとともに、非専門家でありながら、ある特定の専門的領域で活躍する「レイ・エキスパート」<sup>10</sup>を育む可能性も内在していたと推察する。そして、この記事では参加者が市に予算をつけてもらい、もっと協力をしてもらうべきではないかという足利文化財愛護青少年隊の隊員の提案に対し、隊長が「そりゃ、君のいうようにすれば簡単だ。だがいちばんたいせつなのは、だれの世話にもならずに行うことだ」と答えるやりとりが掲載されているが、このやりとりからは、行政の補助金などの協力に頼らない活動に対する自律的な精神を確認することができる。

表2の中の他の文化財愛護少年団がどのような想いで活動に取り組んでいたのか、その詳細は明らかでない。そこで、文化財愛護少年団活動への参加者の想いについて、もう少し考察を加えるため、表2に掲載されるグループよりも活動時期は新しくなるが、1999（平成11）年に『こどもの本』（吉永1999：46-47）に掲載された大分県内で活動する文化財愛護少年団の参加者が記した作文を用いる。

以下は湯布院町文化財愛護少年団の参加者の作文である（同上：46）。

ぼくは、文化財のちょうさでいちばんうれしかったのは、キリシタン墓地のそうじだったときです。(中略) 先生たちがくさのつたところをのけたりしていたら、今までわからなかったみね十三号がみつかりました。それから、先生が「そのへんにまだあるかも」といってさがしたら、まだ文化財になっていない墓が二つでてきました。それでとてもうれしかったです。それで新聞にものって、いちばんうれしかったです。こんど大分県の人がきたら二つ文化財になるといいなあと思いました。

この作文は、県史跡である由布院キリシタン墓群の清掃活動に関わった少年が執筆したものと考えられる。清掃活動中に新たに未指定の墓碑を発見したときの感動が記されており、各地の文化財愛護活動に共通する清掃活動は、単に文化財やその周辺の環境美化につながるだけでなく、文化財を調査し、理解するという側面を少なからず有していたといえる。また、これに付随して新たな発見による楽しさ、うれしさは文化財に対する関心や愛着の芽生えにつながっていることも推察され、こうした気持ちが少年団活動への動機づけになっていたことも考えられる。次は佐伯市の臼坪杖踊り愛護少年団の参加者の作文を掲載する(同上：46-47)。

練習は、毎晩七時から九時までです。練習一日目「できるかな。きびしいだろうな。」不安な気持ちで、練習場の公民館に向かいました。ところが、行ってみると、皆とっても楽しそうに練習していたので、少しホッとしました。(中略) 皆はとてもかろやかにおどっていました。くやしくてたまりません。

その時、練習を見てくれていたおじさん達が「まっこれでも食べて気楽にやりよ」と七輪で焼いた干魚をくれました。とてもこうばしくて、おいしく感じました。(中略) お祭りは二日あり、一日目が三ヵ所、二日目が五ヵ所で踊りました。記念写真もとりました。今までの成果をはっきできるように、自分なりにせいいっぱいがんばりました。(中略) じつは後におばあちゃんの話で、亡くなったおじいちゃんも、明神様の氏子として、小さいころからお祭りにずっと参加していたことを知りました。ぼくにとって、今まで写真でしか知らないおじいちゃんに初めて親しみを感じ、とてもうれしくなりました。

この参加者は臼坪杖踊り愛護少年団活動を通して、臼坪杖踊りが上達するという事以上に祖父と自身のつながりがこの活動を通して明らかになったことについて、印象深く感想で述べており、家族のアイデンティティを認識するに至っている。また、少年団活動が少年団員と指導者という限られた人間関係の中だけでなく、作文では、「練習を見てくれていたおじさん達」のような地域の大人との交流も印象深く記されており、このことは文化財愛護少年団活動が、単に子ども・若者が文化財に関与するというだけではなく、地域住民ひいては、地域社会とのつながりを生成する契機としての役割を担っている可能性を示すと筆者は考える。

上記に紹介した新聞記事や作文で確認できた事項は、全国で活動する文化財愛護少年団の一部の参加者によるものなので、無論、全てのグループや参加者に共通するものではないことが考えられるが、文化財愛護少年団の活動は少なからず、参加者に文化財愛護の想いが芽生えるような契機となり、文化財に対する愛着が地域の愛着へつながり、参加者が自律的な地域の文化財保護の担い手へ成長していく可能性を内在する取り組みであったことが推察される。



## 5. おわりに

本稿では、子ども・若者を対象とする文化財保護施策を展開するひとつの足掛かりとなるような基礎的研究を目的に、子どもや若者が具体的にどのように文化財保護に関与してきたのか、その実態を文化財愛護少年団活動の事例から明らかにした。その結果、こうした活動は、文化財保護委員会の普及課の「文化財愛護地域活動」などの諸施策や青少年育成施策の推進が背景にあった一方で、地域住民や子ども・若者が文化財愛護を希求した内発的側面を有していた可能性を明らかにした。また、断片的な文化財愛護少年団の活動から検証した限りではあるが、こうした活動は、参加者に文化財愛護の想いが芽生える契機となり、文化財の愛着が地域の愛着へつながり、参加者が自律的な文化財保護の担い手へ成長していく可能性を考察した。

最後に本稿の研究課題を示す。1965（昭和40）年頃から全国で発足しはじめた文化財愛護少年団であるが、その現在の全国における活動の動向や詳細は明らかでない。ただ、宮崎県では2018（平成30）年4月1日現在で55団体の活動が報告されており（宮崎県教育庁総務課2018：137）、現在においても連綿とした文化財愛護少年団活動が取り組まれていることが確認できる。こうした現在に至るまでの文化財愛護少年団活動の全国的な把握は、今後の研究課題とする。

なお、少子化が進む現代において、文化財愛護少年団にかかわらず、他分野の少年団もその活動の継続や維持は共通した課題であると筆者は考える。ただ、こうした状況下ではあるが、子ども・若者が地域の文化財への興味・感心ひいては愛着を育む契機として、「文化財愛護地域活動」の施策や文化財愛護少年団活動の継続は子ども・若者が文化財に関わる端緒になることには間違いのないといえる。新たな文化財保護の担い手が希求される現代において、こうした施策の現代的意義は大きく、今後の展開が望まれるが、そのためにも本稿で紹介したような過去の施策の詳細な検証を今後も継続していくことも課題としたい。

## 注

- 1 文部省「小学校学習指導要領社会科編昭和30年度改訂版第2章小学校社会科の目標」  
<https://www.nier.go.jp/guideline/s30es/chap2.htm>（2019年9月4日閲覧）。
- 2 文部省「中学校学習指導要領昭和44年改訂版第2節社会」  
<https://www.nier.go.jp/guideline/s44j/chap24-2.htm>（2019年9月4日閲覧）。
- 3 文化財にかかる「愛護」という用語は、「文化財愛護地域活動」の施策が登場する以前、1958（昭和33）年に建築史を専門とした大岡実が記した「文化財愛護の心」という文章の題で確認できる（大岡1958）。大岡がいう「愛護」は、本文でとくに明確に定義はされてないが、文化財に愛着をもつことが本文では強調されている。「文化財愛護地域活動」の「愛護」は文化財保護委員会の普及課長であった金田智成が「文化財愛護地域活動」を回顧する中で「（前略）国民の間に文化財愛護（保護ではない。）の精神をいかに根づかせるかの、正に社会教育的観点から施策の樹立に向かったのである。」（傍点原著者）（金田1981：80）と記しているように文化財保護とは異なる響きをもった言葉として用いていたことがわかる。金田は「保護」と「愛護」を区別して使用するが、その明確な定義は管見の限りではあるが、確認できない。ただ、金田は「（前略）学習と実践という両面の活動が、とくに地域社会の住民の主体性に基づいてその日常生活をとおして行なわれる場合を指して文化財愛護地域活動と称するのである。」（傍点原著者）（金田1969a：32-33）と「文化財愛護地域活動」を定義することから、文化財の「愛護」とは、日常生活に

おける地域住民の主体性に基づいた文化財の保存・活用の在り方を示す用語としてとらえられると筆者は考える。

- 4 表1は金田（1969a：33-35）に掲載された別表を加工して掲載した。なお、表1の静岡県内の「文化財愛護地域活動」の事例は、金田（1969a）本文から抜粋して掲載したものである。
- 5 『文化財愛護少年団活動事例集』は全74頁のA5判の冊子体で、活動が実施される地域から文化財保護委員会に報告があった団体の記録をとりまとめたものである。1968（昭和43）年3月に発行されたもののみが確認できることから、発行はこの1回に限ったものであったことが考えられる。
- 6 表2は『文化財愛護少年団活動事例集』に掲載の表を筆者が加工したものである（文化財保護委員会1968b：1）。なお、表2の発足年については、『文化財愛護少年団活動事例集』本文に掲載された各事例から抜粋し、主な発足の契機、主な活動は、本文掲載の各事例から要点のみを掲載した。
- 7 青少年問題に関する本稿の記述は、とくに断りのない限り、内閣府「青少年白書平成8年版概要第1部青少年健全育成の30年の経緯と青少年をめぐる環境の変化」を参照した。
- 8 北原久史「今日の顔文化財愛護少年団を作った山田貞吉さん」読売新聞、1983年9月14日付朝刊、3面。
- 9 「足利の文化財を守る公たよらず育てた芽」読売新聞、1967年4月30日付朝刊、22面。
- 10 村上陽一郎によればアメリカで近年使用されはじめた「素人の専門家」の意味をもつ言葉で（村上2004：100-101）、おもに医療分野に実例が確認できるが、政治や福祉、教育の分野においても重要な役割を果たしていくことを予見した（同上：117）。

---

## 参考文献

- 大岡実「文化財愛護の心」『市政』74、全国市長会、1958年、10-13頁。
- 金田智成「文化財をまもる地域活動」『文部時報』1061、文部省、1966年a、31-38頁。
- 金田智成「文化財保護普及行政の方向」『月刊文化財』30、文化財保護委員会、1966年b、26-27頁。
- 金田智成「文化財愛護地域活動の推進について」『月刊文化財』31、文化財保護委員会、1966年c、31頁。
- 金田智成『社会教育随想一灯照隅行』凸版印刷、1981年。
- 内閣府「青少年白書平成8年版概要第1部青少年健全育成の30年の経緯と青少年をめぐる環境の変化」  
[https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h8hakusho/haku\\_01.htm](https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h8hakusho/haku_01.htm)（2019年9月4日閲覧）。
- 文化財保護委員会『文化財保護の歩み』1960年。
- 文化財保護委員会『文化財愛護地域活動事例集』1968年a。
- 文化財保護委員会『文化財愛護少年団活動事例集』1968年b。
- 文化審議会『文化財の確実な継承に向けたこれからの時代にふさわしい保存と活用の在り方について』2017年。
- 文化庁『文化財保護法に基づく文化財保存活用大綱・文化財保存活用地域計画・保存活用計画の策定等に関する指針』2019年。
- 宮崎県教育庁総務課編『宮崎県の教育（平成30年版）』宮崎県教育委員会、2018年。
- 宮野礼一「青少年と文化財愛護」『文部時報』1133、文部省、1971年、48-54頁。
- 村上陽一郎「レイ・エキスパートの役割」池田健一監修『ITと文明サルからユビキタス社会へ』NTT出版、2004年、98-138頁。
- 吉永浩二「ふるさとの文化財を守る子どもたち一大分県文化財愛護少年団」『こどもの本』288、日本児童図書出版協会、1999年、44-47頁。